反帝戦線 NO18

社会主義学生同盟全国委員会機関紙

68 6 24

連絡先 戦旗社 292−0849

6・21街頭バリケード戦の総括をし、反戦斗争委員会の組織化に深化させ、7・29三木訪豪阻止の大衆的実力斗争を準備せよ！

6・26（東京）・6・28（関西）斗争でASPAC粉砕の意志統一を、労働戦線に拡大し、7・29斗争へ前進せよ！

6・30成田現地斗争に全国結集し、侵略空港建設と対決せよ！

6・21斗争は、万余の学生大衆を結集しした街頭バリケード戦として斗われれた。我々は、6・21斗争を次の3点に於て位置付けたし、総括と、なな る方向性に於て行なわなくてはならない。

それは、①日帝の世界分割ーアジア侵略反革命の中心たるASPACー沖縄返還を、その様な性格のものとして暴露し、7・29三木訪豪阻止へ向けての政治過程の流動を切り開くこと、②かかる斗いを、日帝の権力中枢を揺るがす大衆的実力斗争を実現すること、③日大、医科歯科大、東大等々で高揚しつつある学園斗争をこの全人民的な政治斗争の下に統合し、日帝と対決する戦線の拡大に深化を実現し、個別学園斗争自体を大学の帝国主義的再編に対決する斗いへ高めること、の3点であった。全国結集しうる外務省への実力抗議、それを支える中大のバリケードストこの方向性の下へ、大衆の自然発生的な帝国主義に対する反発を吸引し「カルチェ・ラタン」をつくりだすこと、これが我々の方針であった。

一体何を如何に貫徹したのか、また、今後如何に貫徹していくのかなな、総括と展望の基軸である。

〈一〉

6・21斗争の最大の意義は、首都ー権力中枢下での大衆的実力斗争とその斗争戦術＝街頭バリ[illegible]を実現したことにある。

500名の実力斗争部隊による街頭バリケードの構築は、ASPACー沖縄返還を中心とする日帝のアジア侵略反革命に反対する10000名の大衆な、実力斗争部隊と共に斗いに参加することを可能とした。そして、合計15000名による大衆的実力斗争ーバリケードによる国家権力＝機動隊との対決は、万余の大衆の帝国主義権力に対する自然発生的な反発を引きだしたのである。

我々は、日帝の世界分割な、アジア侵略反革命の軍事外交路線として進行し、かつ、内には、自衛隊の強化＝帝国主義軍隊化を基軸として帝国主義国家権力な形成されつつあることを、情勢の基調として把握してきた。そこで、侵略反革命と対決する反戦斗争の方向を、帝国主義軍隊の政治的組織的解体へ向け、この全人民的な政治斗争の下へ、個別経済斗争を統合すること、換言すれば反戦斗争をプロレタリア権力斗争として展開すること（革命的反戦斗争）を方針の基調としてきた。

従って、この革命的反戦斗争は軍事外交路線の行政的貫徹の現地に於て、これを阻止する現地実力斗争（訪ベト、訪米の際の羽田、エンタプラ寄港の際の佐世保、或は成田、王子）なら、軍事外交路線を貫徹する権力中枢（防衛庁、外務省、首相官邸等）への中央実力斗争への斗争戦術の発展を必要不可決とする。

我々は、エンタプラ斗争、4・26−28斗争、6・7斗争に於て、権力中枢への中央実力斗争を一貫して追求してきた。しかしながら、帝国主義軍隊を背景とするナショナリズムと暴力の帝国主義秩序の前に、実力斗争ー玉砕と、大衆斗争ーカンパニアの矛盾に陥ち入ってきた。

6・21斗争は、権力中枢への中央実力斗争を保証する大衆的実力斗争の

戦術形態を遂に実現した。その構造は、オ1に500名の実力斗争部隊、オ2に、このオ1の部隊によって日常の侵略反革命への対決へ組織された1000名の大衆、オ3に万余の大衆である。オ1の部隊は、生活点・拠点に於る恒常的な政治暴露によって、日帝の侵略反革命粉砕という全人民的な政治斗争へオ2の部隊を組織化し、街頭バリケードの構築によって、この部隊と結合した実力斗争を実現したのである。そして、この大衆的実力斗争＝帝国主義国家権力ー機動隊との対峙戦は、帝国主義の経済的政治的抑圧を不断に受けている全大衆の自然発生性を引き出しオ3の部隊をつくり出した。

かかる構造をとって実現された大衆的実力斗争を、真の意味での権力斗争への実力斗争へ飛躍させる為の政治ー組織方針の一層の深化が、我々にとっての課題である。

〈二〉

6・21斗争を、神田に於る学生の自然発生的暴動（その要因は、日大、医科歯科大、東大等の個別斗争の高揚など、従って、帝国主義の全階層への経済的政治的攻撃がつくり出している）に低めようとする陰謀が、帝国主義によって、ブルジョアジャーナリズムを通して展開されている。そればかりではない、6・21斗争の組織過程に於て革マル派は、右翼ー帝国主義と結合して、公然たる反革命として登場し、中核派を先頭として社民・共産党へ至る全党派が沈黙を行なった。

6・21斗争は、日帝のアジア侵略反革命との対決、プロレタリア国際主義の内実をASPACー沖縄斗争として形成することを政治方針とし、外務省ー権力中枢への実力斗争を斗争戦術としていた。

6・21斗争に対する全ゆる反革命と斬払ー本質の隠蔽に抗し、政治方針の戦術性は守り抜かれなくてはならない。これに立脚した組織活動へ（実力斗争部隊の強化と拡大）によって、斗争戦術（外務省ー権力中枢への実力斗争）は、7・29三木訪蒙阻止へ向けて実現されなくてはならない。それは、実力斗争部隊の強化ー拡大になっている。このことは、ASPACー沖縄斗争、日帝のアジア侵略反革命との対決の国際的意義、即、国際プロレタリアートの団結＝プロレタリア国際主義の内実の形成を抜きにはありえない。

帝国主義の世界分割ー再分割ー革命の激化が一方で進行し、他方で、後進国人民の武装解放斗争と帝国主義国労働者階級の共同した戦線が帝国主義を追い詰め、帝国主義国に於る階級斗争に、事態の深刻化をもたらしつつある。この国際階級斗争の高揚の前に、帝国主義の没落、危機、分裂が進行している。

英帝国主義は、オ2次大戦以降の民族解放斗争への敗北（インド、ビルマ、エジプトから現在のイエーメン一等）と、重化学工業化の立ち遅れ→帝国主義間経済競争での敗北→経済危機の進行を、2要因として没落した。保守党から労働党への政権移行、労働党政権による国内抑圧は、所得法案をめぐる労働者階級の全面斗争の高揚を契機として労働党の分裂傾向ー左派の形成をもたらしている。この危機の突破は、EECへの加盟という新たなブロックか、米との同盟という旧来のブロックの維持かの、選択を迫まられている。

だが、EECも、新たな再編をむかえている。仏帝国主義は、EECの経済力、旧アフリカ植民地の統合を基礎に、NATO脱退ー独自の核武装を実現し、独力での世界分割を展望した。だが、EECに於る西独帝国主義との経済競争戦での敗北→労働者階級の全面斗争の高揚を一方の要因として、他方、インドシナ、アルジェリア等の民族解放斗争への敗北→民族独立の承認→後進国支配＝侵略反革命への政治的結集力と軍事的力量の弱さという要因によって、5月ゼネスト→ドゴール体制の危機→独自の世界分割の中途挫折に陥入った。道は、国内労働者階級の粉砕による独力での世界分割か、対米ー西独とのブロックか、西独ー米とのブロックか の選択であり、その経済力からして、いずれも、2流帝国主義への転落ー国内階級斗争の高揚でしかない。

米帝国主義の危機と、EEC、日本帝国主義の台頭→経済危機と、ベトナムーアジアー中南米民族解放斗争への敗北→政治的危機 を2要因とする黒人斗争と反戦斗争の高揚によってもたらされた。ブルジョアジーは、太平洋派（民族解放斗争の粉砕と日帝との同盟）と大西洋派（民族独立の承認とEECへの再介入）への分裂を深めている。

この米帝国主義の危機と分裂、統一的な世界戦略の喪失は、一方では

西独、日本帝国主義の世界分割への経済的、政治的、軍事的登場（NA）、日米安保の再編と、他方に於て、これをもたらす西独、日本帝国主義の侵略反革命と抑圧に対する国内労働者階級の斗いの高揚を形成している。

西独帝国主義は、東欧―中近東への経済的膨張＝労働者階級を収約し（大連合政権）、NATO中央正面軍（対ソ戦線）への軍事力を集中的に強化（27個師団中、米＝5個師団に対し、西独＝12個師団）し、NATOの主導権を米帝から奪いつつある。日帝は、極東、東南アジア、太平洋地域への経済的膨張を日韓条約を突破口に開始し、労働者階級をこの下に収約（民社―同盟、JCの抬頭）してきた。そして、南下の軍事的拠点＝沖縄の返還を米帝に迫り、日米安保の主導権をとらんとしている。

世な、西独、日帝の世界分割＝侵略反革命の軍事外交路線と、それを可能とする帝国主義軍隊を基軸とする国内支配体制の強化は、労働者階級の反撃を形成している。西独に於る非常事態法に対決する学生労働者の鋭い斗いと、西独帝国主義の台頭に恐怖した東独―ソ連の強硬路線の登場とは、大連合政権、従って、国内階級関係の再編を不可避であることを明示している。日帝のアジア人民武装解放斗争への侵略反革命の強化も、反戦斗争の高揚を形成している。

今や、帝国主義の世界分割を媒介として、帝国主義国に於る階級斗争の高揚が開始されている。侵略、反革命、抑圧をめぐって斗なわれるこの階級斗争に於て、「帝国主義の世界分割＝侵略反革命の粉砕↓帝国主義の打倒―プロレタリア独裁の実現」に於る国際プロレタリアートの結合、とりわけ、「自国帝国主義の侵略反革命粉砕↓自国帝国主義打倒―プロレタリア独裁」に於る帝国主義国プロレタリアートの結合が、要求されている。

何故なら、諸帝国主義が、帝国主義間対立＝自国プロレタリアートの民族国家内への包摂＝ナショナリズムによって、労働者階級の斗いの高揚を粉砕し、侵略反革命＝世界分割を行なおうとしているからである。英帝は、EECの加盟の経済的展望とそこに於る西独、仏帝との競争を通して、国内労働者階級の経済斗争を分解させんとしている。仏帝は、インドシナ、アルジェリア民族解放斗争への侵略反革命の敗北による危機を反米を基軸に突破し、今また、5月ゼネストの危機を、西独との対立を基軸に乗り切らんとしている（西独駐留軍とドゴールの結合）。西独帝国主義は、非常事態法を、米英仏の占領状態からの脱却として提起し東独再統合のナショナリズムの下に、東欧、中近東への侵略反革命を、ソ連との対決を通して実現せんとしている。日帝も、沖縄返還―対米自主性を通して、アジア侵略反革命―中国との対決を行なわんとしている。米帝も、日帝、EECの台頭に対する危機感の中で、反戦斗争―黒人斗争を粉砕し、より強固な侵略反革命を、必ずや準備してくるであろう。

従って、帝国主義国プロレタリアートは、自国帝国主義の世界分割＝侵略反革命との対決を通してのみ、帝国主義間対立＝民族への分断＝ナショナリズムを突破し、国際的に結合しうるのである。

だから、国際プロレタリアートの団結＝プロレタリア国際主義は、論理的＝政治的質に於ては、世界的に同時であり、それは、「帝国主義の世界分割粉砕↓帝国主義打倒↓プロレタリア独裁」の下に意志統一された国際的統一戦線とそれを指導する世界党に表現され、組織化される。そして、具体的、形式的には、一国的であり、「自国帝国主義の世界分割＝侵略反革命粉砕↓自国帝国主義打倒↓プロレタリア独裁」として、帝国主義国に於ては実現されなくてはならない。

従って、一方に於る国際的なプロレタリアートの組織的結合の強化が一国に於るプロレタリア独裁への斗いの深化をつくりだし、他方に於て一国的な斗いの帝国主義国家権力への肉迫が、組織的に結合した国際プロレタリアートの政治的質を深化させるのである。だから、我々は、国際プロレタリアートの組織的結合＝8・3国際反戦集会への前進と、その政治的質の深化＝日帝の侵略反革命と対決する革命的反戦斗争と権力中枢への肉迫を、6・7↓6・21↓7・21へ至るASPAC―沖縄斗争の発展として、同時的におしすすめる。

かかる意味で、6・21斗争は、極めて国際的な斗いであり、その中軸を担った実力斗争部隊は、かかるプロレタリア国際主義の普遍性に支えられていたことをはっきりと確認しな

くてはならない。6.21斗争に於て実現されなかった外務省－権力中枢への肉迫の実現、従って、実力斗争部隊の強化と拡大は、7.29三木訪豪阻止へ向けての、日本に於る革命的反戦斗争の発展と8.3国際反戦集会へ向けての国際的な組織的結合の発展とな、とだらるプロレタリア国際主義の内実の深化の相乗的な論理を、はっきりと意識化することによって可能となるのである。

……〈三〉……

次に、プロレタリア独裁＝ソヴィエトの形成へ向けてのプロレタリアートの運動＝組織形態の発展に於る、6.21斗争の位置を明確にしなくてはならない。

プロレタリア独裁の権力形態たるソヴィエトは、生産点の掌握、スト、生産管理、工場バリケードの構築の上に、赤軍の建設と市街戦を通じた帝国主義国家権力の打倒として実現される。従って、6.21街頭バリケード戦は、生産点に於るプロレタリアートの斗いな存在しないことならくて、たとえ、その斗いに労働者階級な参加したとしても、また、たとえ権力中枢へのより鋭い斗争な展開されたとしても、この斗争戦術の外延的な拡大をもって、ストレートにソヴィエトの形成を展望することはできない。

だが、問題とされるべきは、生産点を基礎とするプロレタリアートの権力形態＝ソヴィエトの形成を可能とする団結の質の形成、斗いの内延的発展に於る、6.21街頭バリケード戦の位置である。この団結の質＝政治は、プロレタリア国際主義でなくてはならない。何故なら、独占資本主義としての帝国主義は、金融資本－金融寡頭制として、国民経済と民族国家の、経済と政治を全て独占し、この独占などにもたらされた諸階級諸階層の反抗－危機を、帝国主義国家間対立－ナショナリズム－世界分割へ外化させるならである。従って、この帝国主義の世界分割と対決する国際的なるプロレタリアートの結合＝プロレタリア国際主義の形成を通してのみ、帝国主義の全面的[illegible]支配の打倒＝プロレタリア独裁は可能となる。

そして、帝国主義の世界分割＝侵略反革命粉砕＝帝国主義打倒＝プロレタリア独裁というプロレタリア国際主義の内実の形成は、既に、今で述べた如く、革命的反戦斗争、権力中枢への実力斗争を[illegible]の条件とすると、その為の斗争戦術の一段階として、街頭バリケード戦は存在した。

だから、我々は、今後、街頭バリケード戦＝権力中枢への斗争戦術の発展の中で、プロレタリア国際主義の下に労働者階級を組織する、換言すれば、党による大衆の[illegible]推進していかなければならない。このヘゲモニーを形成してのみ、生産点に於るプロレタリアートの斗い、ソヴィエトの形成は可能となる。

〈四〉

だなら、6.21斗争の総括は、党による大衆の獲得－プロレタリア国際主義のヘゲモニーの形成の組織方針に結実されなくてはならない。それは、普遍的には、ソヴィエトの形成にとって必要であり、特殊学生戦線に於ては、実力斗争部隊の強化と拡大、街頭バリケード戦なら更に発展して、権力中枢への実力斗争を実現するために必要なのである。

それは、日帝のアジア侵略反革命の軍事外交路線との対決＝反戦斗争という全人民的政治斗争を斗う先進的大衆の組織としてまず形成されるくてはならない。そこで、我々は、この組織の内部に於て、反戦斗争をプロレタリア権力斗争として斗うこと、日帝のアジア侵略反革命粉砕＝日帝打倒＝プロレタリア独裁へ至るプロレタリア国際主義の下に、かなる先進的大衆の再組織化を追求しなくてはならない。

この組織＝反戦斗争委員会は、ななる政治的質の形成をとって、革命的反戦斗争と権力中枢への中央実力斗争の先頭に立ち、なつ、個別経済斗争を、この全人民的な政治斗争の一環として斗わなくてはならない。

それは、具体的には、6.21斗争に於る第1の500名の実力斗争部隊と第2の1000名の先進的な大衆を結合する組織であり、プロレタリア国際主義を媒介に、第2の部隊な実力斗争部隊へ転化していく組織である。このこと、先進的大衆の党への結集と、実力斗争部隊の強化と拡大によって、街頭バリケード戦＝権力中枢への実力斗争が可能となるのである。

我々は、同盟の下に、この反戦斗争委員会を組織し、7.29三木訪豪阻止斗争に於て、街頭バリケードなら権力中枢への実力斗争への斗いの発展をなしとげ、8.3国際反戦集会に

達るのはプロレタリアートの国際的結合の政治的質の深化をかちとるであろう。

〈五〉

我々は、70年安保～70年代階級斗争を、①革命的反戦斗争、街頭バリケードと権力中枢への実力斗争、②プロレタリア国際主義（日帝のアジア侵略反革命＝世界分割粉砕→日帝打倒→プロレタリア独裁）の政治的組織的ヘゲモニー、③生産点におけるゼネスト－生産管理－ソヴィエトの建設の下に展望する。

そして、政治斗争＝反戦斗争の斗争戦術を、基地斗争＝地域人民斗争に貶める試みを批判しなくてはならない。現地実力斗争を発展させたこの基地斗争方式は、中核派によって推進されている。それは、政治斗争たる反戦斗争と、経済斗争を、現地点において、即自的なプロレタリアートに媒介に結合させんとする自然発生性への拝跪である。それは、基地のもたらす公害、基地拡張による地域住民の生活破壊への個別利害的利害に基づき政治斗争を結合[illegible]り、軍事物資の生産、輸送を媒介に政治斗争と反合理化斗争＝経済斗争を結合させようとする試みである。個別経済斗争を政治斗争へ発展させようとするこのサンディカリズムと、政治斗争＝国家権力との対決を機動隊＝暴力装置への物理的衝突に貶めるこのハネ上がり主義を批判しなくてはならない。

板付基地斗争（6／7）、伊丹基地斗争（6／26）、米軍タンク輸送阻止斗争（6／26）、成田現地斗争（6／30）という地域＝現地斗争へ、中核派

を実現した原因は、体制内帝国主義論から導き出されてくる「反米の民族主義化→反日帝」路線であり、プロレタリア国際主義の喪失である。

我々は、プロレタリアートの国際的の質を、「日帝の侵略反革命＝世界分割粉砕→日帝打倒→プロレタリア独裁」へ具体化されるプロレタリア国際主義に求め、侵略反革命の具体たる自衛隊の帝国主義軍隊化の粉砕→解体を要求する革命的反戦斗争を、権力中枢への実力斗争という斗争戦術をとって推進し、かかる政治斗争に登場する先進的大衆とプロレタリア国際主義の下に組織し、この政治的組織的ヘゲモニーをとって生産点におけるスト－生産管理斗争を実現しソヴィエトの形成を展望する。

従って、基地斗争、現地斗争は、中央実力斗争への一過程であり、経済ストは、プロレタリア国際主義に基づく政治ゼネストと大衆の獲得を通じた、政治スト、反戦ストの形成の場である。さらに、米軍の軍事活動と対決する反戦斗争は、米軍基地労働者との連帯と、米軍との共同行動下に進行する日帝の軍事力強化への対決へ向けて大衆を組織する場である。

だから、我々は、6／26（東京）－6／28（関西）、6／30（成田）における反戦青年委員会との統一行動において、6月斗争の質を労働者大衆の中にとら込み、7月斗争の戦線の拡大を追求する。